

古墳時代後期における吉備最大の前方後円墳

史跡こうもり塚古墳

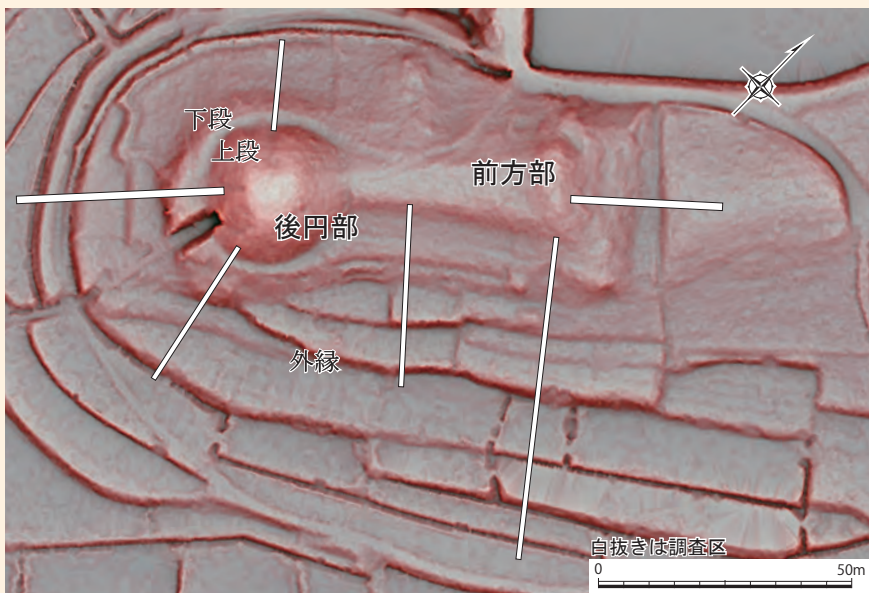
総社市上林

史跡こうもり塚古墳は、総社市の南東に位置する古墳時代後期（6世紀）の大型前方後円墳で、この時期としては吉備最大、西日本でも屈指の規模を誇る古墳です。全国有数の巨大な横穴式石室（全長19.4m）を有し、装飾大刀をはじめとする豊富な副葬品が出土したことから、吉備を代表する大首長墓と評価され、その重要性から昭和43（1968）年に国の史跡に指定されました。この史跡こうもり塚古墳については、昭和42年に岡山大学・岡山理科大学による調査団が、昭和53年に岡山県教育委員会が発掘調査を行っています。いずれも横穴式石室を対象とした調査でしたので、これまで墳丘の正確な規模や構造などに関する情報はありませんでした。

そのため、岡山県古代吉備文化財センターでは、この課題を解決すべく「吉備路の歴史遺産」魅力発信事業の一環として令和3・4年度に発掘調査を行うことを計画しました。そして、実に43年ぶりとなる史跡こうもり塚古墳の発掘調査を本年度9月から12月に実施しました。今回の発掘調査では墳丘の大きさや盛土の状況、葺石や埴輪などの外表施設の有無、古墳の周辺の様子などを明らかにすることを目的に、計6か所の調査区を設定しました。



史跡こうもり塚古墳の発掘調査（南から）



史跡こうもり塚古墳と調査区配置図

調査の結果、古墳の墳丘は上段と下段の二段築成で、墳丘端部を確認したことから、残存墳長は約97mであることが判明しました。前方部の墳丘は、上段は盛土ですが、下段は元の地形を削ることで造り出されていました。他方、後円部の墳丘は築造前の地面に溝を設けたり、墳丘に異なった土を交互に盛り上げたりなどして構築されていることが分かりました。また、どの調査区においても埴輪や葺石は確認できず、このような外表施設はもともと設けられていなかったようです。さらに、墳丘の周囲には幅数十mにわたって外縁が設けられていた可能性があることも分かりました。これらは、史跡こうもり塚古墳の墳丘復元だけでなく、古墳の性格や意義を考える上でも重要な成果と言えます。なお、調査成果については、11月23日（火曜日）に開催した現地説明会で一般に公開しました。コロナ禍により事前募集で行いましたが、定員いっぱいの120名に見学いただきました。

その他、この事業では、みなさんに史跡こうもり塚古墳について知っていただくため、史跡こうもり塚古墳のパンフレットも刊行しています。また、ふだんは入ることのできない横穴式石室をみなさんに体感していただくこと、岡山県立岡山工業高等学校と連携して横穴式石室のVR（バーチャル・リアリティ：仮想現実）を作成しました。いずれも当センターでご覧いただけますので、ぜひともご来館ください。
(金田善敬)



後円部上段の盛土（南西から）



大勢の参加者が訪れた現地説明会



史跡こうもり塚古墳の石室VR公開

津山市高尾に所在する高尾北ヤシキ遺跡では、一般国道53号（津山南道路）改築工事に伴い、令和元年度から発掘調査を行いました。この遺跡は津山盆地の南西の嵯峨山東麓に位置しており、眼下には皿川沿いに谷底平野が広がります。調査地は急斜面からなる北側と、緩斜面からなる南側に分かれ、中央にやや低い谷部があります。

調査地全域で弥生時代から中世の生活痕跡を確認しましたが、特に中央の谷部から南側の傾斜地で遺構が多く見つかりました。確認した遺構は、弥生時代中期の段状遺構6面、木棺墓1基、古墳時代後期の竪穴住居10軒、段状遺構16面、土坑墓1基、中世の掘立柱建物24棟、段状遺構14面、多くの柱穴などがあります。

中央の谷部では、古墳時代後期のカマドを備えた竪穴住居1軒、段状遺構4面、土坑1基が複雑に重なった状態で見つかりました。これらの遺構からは、土師器、須恵器、碧玉製管玉、ガラス製小玉、鉄滓、桃の核（種）などが出土しました。

中世の遺構は、主に中央の谷部から南側にかけて、5面の造成面の上に造られていました。各造成面では掘立柱建物や段状遺構、土坑、柱穴が、幾重にも重なるように見つかりました。中世の遺物は、土師器、備前焼、瓦質土器、天目茶碗、青磁、白磁、鉄器、銅滓などがあります。このうち、中央の谷部で見つかった段状遺構に伴う小穴からは、鏡のような形をした青銅製品が出土しました。青銅製品は直径11.2cmの円形で、周りの細い縁には釣手が付いています。表面に像は今のところ認められませんが、形や釣手の特徴から、鏡像又は鏡である可能性があります。鏡像とは、平安時代の終わり頃から江戸時代に寺社などに懸けて信仰の対象としたものです。この青銅製品は遺跡の性格を知る上で注目されます。

調査の結果、この遺跡では弥生時代中期から中世まで、断続的に生活が営まれてきたことがわかりました。古墳時代後期の遺構は、周辺の佐良山古墳群と時期が重なり、古墳の造営に携わった人々の集落であったと考えられます。また、高尾北ヤシキ遺跡のある津山市佐良山地区は、かつては美作国久米郡に属し、奈良時代より「佐良荘」という荘園がありました。このことは14世紀半ばにまとめられた『神護寺略記』に、826年に佐良庄が山城国高雄山神護寺の所領となったということが記されています。周辺で確認された中世の遺跡に限られるなか、本遺跡では中世の遺構や遺物がまとまって見つかったことから、荘園に関わる村落であった可能性があります。（西村 奏）



調査区北半全景（南西から）



古墳時代後期の竪穴住居と段状遺構（南西から）



青銅製品の出土状況（南から）

南方遺跡

みなみがた
岡山市北区南方

岡山地方法務局本局庁舎新営に伴い、令和3年8月から令和4年2月まで南方遺跡の調査を行いました。今回の調査地は江戸時代の武家屋敷と弥生時代の集落の範囲にあたります。

江戸時代以降の遺構面では、主に江戸時代後半の井戸や土坑、溝、杭列を検出しました。このうち溝や杭列は東西・南北方向に沿うものが確認され、屋敷地の境を示すものと考えられます。

また、弥生時代の遺構面では弥生時代後期後半の同じような特徴を持つ土坑群を検出しました。これらの平面は楕円形をしていて長径が1mから4m程度を測ります。断面は袋状になっており、底部を横に広げて掘っていました。埋め土は塊状で、掘った直後に埋められた様子がうかがえます。少量の土器が出土した土坑もありますが、ほとんどが無遺物でした。（氏平昭則）



江戸時代後半の土坑



弥生時代後期の土坑群（南から）

城田遺跡

じょうでん
美作市城田

美作岡山道路の改築工事に伴い、城田遺跡の発掘調査を実施しました。遺跡は美作市南部、旧英田町城田に所在する丘陵の南東向き斜面上に立地します。調査の結果、弥生時代中期の段状遺構2面・土坑1基、古墳時代後期のものと考えられる横口付製炭窯1基などが確認されました。

弥生時代中期の段状遺構と土坑からは、多数の土器のほか、狩猟用の石鏃や、稲の穂つみに使う石包丁などの石器も出土し、当時の暮らしの一端がうかがえます。

横口付製炭窯は、長さ約9.2m・幅約0.75mの細長い燃焼室（炭の原木を詰める場所）の側面に、炭を取り出すための横口を複数設けた構造です。また、周囲には煙出しや排水溝が付属しています。同様の形態の遺構は、付近に製鉄炉が伴う例が多くみられることから、製鉄用の木炭を生産する施設と考えられており、周辺で製鉄が行われていたことが推察できます。（北門幸二郎）



弥生時代中期の土坑



古墳時代後期の横口付製炭窯

職場体験

当センターでは、毎年、岡山市内の中学校の職場体験を受け入れてきましたが、昨年は新型コロナウイルス感染症の拡大により実施できませんでした。

今年度は、感染拡大がひとまず落ち着いた12月7日（火曜日）～9日（木曜日）に、岡山市立御南中学校2年生3名の職場体験を行うことができました。

生徒たちには、出土品の計測や梱包作業のほか、センターを訪れた見学者の案内も担当してもらいました。また、南方遺跡の発掘調査現場では、遺構の発掘や実測を体験しました。このほか、センター職員と一緒に所内の清掃作業にも汗を流してもらいました。

生徒たちからは、「仕事はやりがいを感じながらすることが大事」「楽しい仕事しか教えてもらえないかと思っていたが、そうではなかった。」「将来の仕事を考える上で重要なヒントになった。」「土器を掘ったり、実測のやり方を教わった。」「昔の人のすごさについて知ることができた。」「まだ自分が知らなかったことを学べた。」「苦手だった敬語をしっかりと使えるようになった。」などの感想がありました。

（小林利晴）



発掘体験（岡山市北区南方遺跡）



展示室の解説

展示室から

今年度は2回の企画展と4回のテーマ展示を行いました。これに加えて調査速報展やリニューアルした常設展示も開催し、“何度訪れても目新しい展示室”を目指した一年でした。

企画展1「食を料る」は、食に関わる出土品の展示から、「和食」を生み出した調理技術の原点を知ってもらおうと開催したものです。現在開催中の企画展2「真金吹く吉備」は、鉄生産がいち早く始まり、わが国有数の鉄の産地となった吉備の鉄作りの歴史を紹介しています。会期は5月15日（日曜日）までとなっています。

テーマ展示1「古墳時代の玉類」は、平成26～30年度にかけて実施した岡山県を含む14県の共同研究の成果をもとに、吉備の玉文化を紹介しました。テーマ展示2「顔のある焼き物」は、弥生時代の精神文化を伝える顔を表わした分銅形土製品を展示して、吉備で育まれた造形美を紹介したものです。テーマ展示3「あそびの道具」は、岡山県児童相談所の里親制度普及啓発月間にあわせ、県下の集落遺跡や城下町から出土した独楽やサイコロなどの遊びの道具を展示しました。テーマ展示4「銀で飾られた大刀」は、平成30年度に発掘調査を実施した津山市桑山南1号墳出土の銀象嵌大刀の公開にあわせて、岡山市西山2号墳、平瀬2号墳の銀象嵌鏢や赤磐市平岩古墳の銀象嵌鏢柄頭などを展示しました。また、発掘調査成果の速報展として、浅口市城殿山遺跡出土の水晶製勾玉や津山市高尾北ヤシキ古墳出土の煙突形土製品なども展示しました。

展示室は、土日・祝日も開館しています。ぜひ一度いらしてみたいかがでしょうか。

（團 奈歩）



開催中の企画展2の様子

つしま 津島遺跡の見学

県総合グラウンドにある津島遺跡やよい広場や当センターには、毎年、たくさんの小学校が社会科見学に訪れます。今年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大により緊急事態宣言が2度にわたって出され、小学校見学の多くは中止となりました。しかし、感染拡大が落ち着いた時期に見学した市内の学校や修学旅行として訪れた市外の学校もあり、計17校1,385名（津島遺跡：8校832名、センター：9校553名）の小学校を案内することができました。

津島遺跡やよい広場では、復元された竪穴住居や高床倉庫などの案内のほか、石包丁を使った収穫体験を行うこともあります（写真左下）。こうした見学や体験では、津島遺跡ボランティアのみなさんが活躍します。ボランティアのみなさんは遺跡の説明がとても上手で、小学生への対応も優しく丁寧です。「ボランティアの方に案内をお願いします。」と小学校からリクエストを受けることさえあります。

ところで、小学校の見学案内をしていると、とてもうれしいことがあります。それは、お礼の手紙（写真右下）をいただくことです。ここでは、津島遺跡やよい広場を見学に来た岡山市清心小学校2年生の手紙をいくつか紹介します。

<小学生の感想>

「稲刈りをおしえてもらってうれしいよー！」「米をむかしの人は大事にして、石の道具で収穫するんだとわかりました。」「刈り取った米は、昨日ごはんにして食べました。」「稲は昔からトラックで収穫するのだと思っていました。」「昔の倉庫は床を高くして湿気をなくし、ねずみが来ないのですごいと思った。」「大きくなったら遺跡を発掘してみたいです。」（小林利晴）



津島遺跡ボランティアによる穂積み指導



小学生からの手紙

報告会「大地からの便り2021」

「大地からの便り」は、センターが毎年開催している県内の発掘調査成果をお知らせするイベントです。今年度は令和3年9月4日（土曜日）に開催予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の拡大を受けて対面で行うことはできませんでした。

このため、当日発表予定であった発掘調査についての解説動画を作成し、YouTube上で配信しました。今回浅口市城殿山遺跡、津山市桑山古墳群・高尾北ヤシキ古墳、真庭市阿波土居跡の調査成果を公開しました。コロナ禍においても多様な情報公開を続けていけたらと思います。（和田 剛）



YouTube での配信（桑山1号墳）

講演会「アクセサリーからみた古代」

1月22日（土曜日）に岡山県立図書館を会場にして、谷澤亜里先生（奈良文化財研究所）と高田貫太先生（国立歴史民俗博物館）による講演会、「アクセサリーからみた古代」を開催しました。当日は新型コロナウイルス感染症の急拡大を受け、両先生の講演動画を上映しました。

谷澤先生は、まず玉類の種類や製作技法について説明されました。続いて古墳時代を通じてヤマト王権中枢が最新の玉類の輸入・生産を独占していたと指摘しました。一方、各地域においては弥生時代から続く伝統的な玉類の生産も継続していたと評価されました。

高田先生は5・6世紀に広まった耳飾りなどの貴金属製アクセサリーに焦点を合わせました。これらアクセサリーを身につけた人々は倭の地域有力者や百済などからの渡来人であったとした上で、彼、彼女らは「境界」を往来する人々であったと指摘されました。

今回は、講演会の様子をYouTubeでライブ配信し、延べ233人の方にご覧いただきました。（和田 剛）



講演会場の様子



YouTube でのライブ配信

吉備の考古学講座

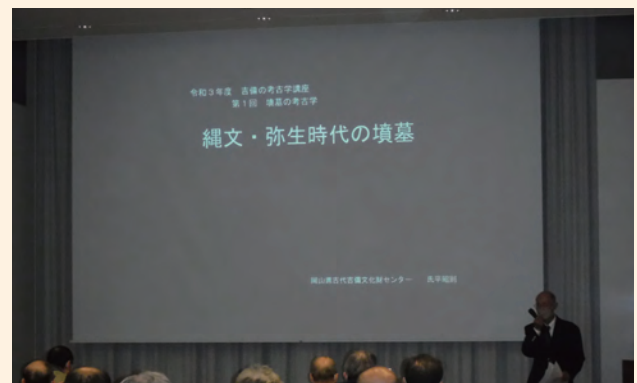
県立図書館多目的ホールにおいて、「墳墓の考古学」と題した連続講座を開催しました。今回は縄文から江戸時代までの墳墓の特徴や変遷についてセンター職員2名が講義しました。第1回は11月21日（日曜日）に開催しました。また、第2回は2月26日（土曜日）に開催しました。

第1回の講座は、縄文～古墳時代の墓について講義しました。まず氏平昭則総括副参事が「縄文・弥生時代の墳墓」について解説しました。縄文時代の墓は貝塚の近くで営まれたが、続く弥生時代に入ると、専用の墓域に区画を設けるものが出現すると指摘しました。また、その発展上に、弥生時代後期の楯築弥生墳丘墓を位置づけました。

続いて「古墳時代の墳墓」と題して、四田寛人主事が解説しました。まず、古墳は前方後円墳の成立（3世紀）から終焉（7世紀）まで築かれた、墳丘墓であると定義しました。その後、古墳の種類や変遷について説明しました。また、古墳を見ていくことで、首長による吉備内部や畿内・讃岐など様々な地域間交流について知ることができると指摘しました。（和田 剛）



講座会場の様子



第1回講座の様子

◆丘陵上に築かれた謎の施設群

大田茶屋遺跡は、津山市街地北側の丘陵上に立地し、現在は「グリーンヒルズ津山」の敷地となっています。平成6・7年度の発掘調査により、縄文時代から江戸時代まで及ぶ各種の遺構・遺物が検出されました。中でも注目されるのが、古代から中世初め頃にかけての大規模な施設群です。

奈良時代から平安時代初頭には、南東向きのゆるやかな斜面に、合計16棟の掘立柱建物群が2時期にわたって建てられています。北側に大型の建物を置き、その南側に倉庫を含む建物群をおおむね2列に配置したようです。これらの建物群は、規則的な配置状況や、周辺から美作国府・美作国分寺と同じ型で作られた瓦が出土したことからみて、美作国の官衙（役所）に関わる施設であったと推測できます。さらに、瓦塔（仏塔を模した土製品）の出土から、仏事を行う宗教的な施設も伴っていたと考えられます。

時代が降って、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけては、丘陵頂部の建物群を取り巻くように、長大な柵が設けられています。柵は複数の箇所に分かれて検出され、総延長は500m以上に及ぶ規模です。それぞれの柵は、平行する複数の杭列からなり、杭同士を縦横に連結して、内部の建物群を厳重に守っていたようです。この柵と建物群の機能ははっきりしませんが、平安時代末期の不安定な社会情勢を背景に築かれた、砦のような性格の施設だったのかもしれない。

大田茶屋遺跡の施設群は、性格がいまひとつ不明瞭なもの、遺構・遺物の特徴に加え、美作国府や美作国一宮の中山神社ともほど近い位置にあることから、古代から中世初め頃にかけて、政治的・宗教的に重要な役割を果たしていたことは間違いありません。

（岡本泰典）



奈良～平安時代の掘立柱建物群



平安時代末～鎌倉時代初頭の柵と建物群

編集・発行

岡山県古代吉備文化財センター

所在地 〒701-0136 岡山市北区西花尻 1325-3
TEL (086) 293-3211 FAX (086) 293-0142
<https://www.pref.okayama.jp/site/kodai/>
<https://www.facebook.com/okayama.pref.kodai>

- ◎ 交通案内 JR 山陽本線庭瀬駅下車徒歩 40 分
JR 桃太郎線吉備津駅下車徒歩 25 分
- ◎ 業務時間 AM8:30～PM5:15
- ◎ 休業日 土・日曜日及び祝日、年末・年始
- ◎ 展示室の開館 AM9:00～PM5:00
年末・年始を除き、土・日・祝日も開館しています。
ただし、臨時に休館することがあります。

